〈特集「宗教における『信』の諸相」〉

シンポジウム「宗教における『信』の諸相」趣旨説明

――神道・仏教・キリスト教・イスラームの視座から――

飯田篤司

去る六月二四日、鎌倉女子大学において開催された比較思想学会第三三回大会では、総合シンポジウム「宗教における『信』の諸相――神道・仏教・キリスト教・イスラームの視座から」が開催された。パネリストには薗田稔名誉教授（京都大学）、竹村牧男教授（東洋大学）、月本昭男教授（立教大学）、鎌田繁教授（東京大学）という、日本を代表する研究者をお招きし、それぞれの宗教伝統において「信」はいかなる意義を担うものであるかを比較対照することによって、宗教における「信」のあり方の豊饒さとともに、その共約可能性と今日的意義にも光を当てていくことを狙いとするものであった。

言うまでもなく、宗教にとって信仰とはその核心をなすものであり、近代における宗教理解では、特にプロテスタンティズムの影響下、内面的信仰にこそ宗教の本質を求める傾向も強かった。しかし同時に、宗教を単なる命題的知識に矮小化するものとの指摘も少なからずなされてきた。もし宗教的な信仰というものが「超越的存在に対する実在」といった命題に対する同意以上のものであるとしたら、その超過するものとは何であるのかも問われよう。

これはまた、「信仰と真理」という伝統的な問題にも必然的に繋がっていく。実際、近代においては科学主義の覇権の下、宗教には「時代遅れの誤った命題」といった批判もなされてきた。宗教的信仰が単なる「命題への同意」ではなく、しかも信仰における真というものが単なる「思い込み」以上のものであれば、いかなる意味においてその真理は語られるのか。「狂信」や「熱狂」といった語彙で語られてきた問題群は今日なお問われねばならないことは言うまでもあるまい。

また「信」に力点が置かれるあまり、近代の宗教理解においては、その実践的契機といったものが軽視されてきたとも指摘されている。もし外的で身体的な実践という要因が宗教にとって本質的な意義を担うものであるとすれば、それは内的な相に想定される信と、いったいいかなる関係にあるのかも問われよう。

さらにまた、今日のグローバル化世界における宗教のあり方といった問いとも関連することとなろう。宗教の「信」は相互理解を阻む、概念枠組みのような障害として思念されることも少なくはない現状に鑑みる時、その現代的意義は必ずしも自明ではなくなる。

「宗教における信」とは、一見あまりにも当然に映る反面、現在なお看過し得ない多様な問題系に連なり、改めて問い直していく必要があろうかと思われる。こうした問題意識を背景としつつ、まず薗田稔氏より、「宗教における『信』の諸相――神道の視座から――」と題して日本における信仰のあり方をご講演いただいた。今日の信仰観においては、信仰には実在措定的な含意を有することはこれまでも指摘されてきたが、薗田氏は実践の道として「あえて教義を立てない」神道のあり方を対置することで、近代西欧的な信仰観の相対化を進めていく。薗田氏は、存在論的な信念であるbeliefに対して、faithが示す経験論的信頼ないし人格的仮託という位相において、宗教的信仰の本質を見ていく。そして「アニミズムに属すべき生命的霊性への半命題的な習俗的観念」レベル、「祭祀・祭礼の儀礼的実践にもとづく経験論的信頼」の水位、そして「無安心即安心」（本居宣長）とも表現される「人格的仮託」という信の三様相を区別していく。こうした信の位相を巡る問題提起は、その後の議論の基調をなしていくこととなった。

次に発表された竹村牧男氏は「宗教における『信』の諸相――仏教の視座から――」と題して、信と覚とが織り成す複雑な関係性を、仏教のさまざまな宗派に配視しつつご講演いただいた。通例、キリスト教に象徴される「信の宗教」に対して、仏教は「覚の宗教」として対置されてきた。しかし竹村氏は、キリスト教においても「自覚の宗教」と形容できよう面があるのと同様、仏教においても、その成就の根本には信が存すると指摘する。そして信仰と実践的契機とが結びつくことによって織り成される、弁証法的とも形容できよう、宗教の現象の複雑かつ力動的な様相を浮かび上がらせていく。こうした問題提起は宗教における内的な心的要因と、外的な実践的要因との関係性の問題、さらには信仰における真理という問題にも必然的に繋がる問題提起となった。

続いて月本昭男氏は「宗教における『信』の諸相――キリスト教の視座から――」と題して、近代的な信仰観にも大きな影響を与えたキリスト教における信仰の様相をご講演いただいた。言うまでもなく、ルターの「信仰によりてのみ」という標語に象徴されるよう、内的な信仰という要因はキリスト教伝統において、重

要な意義を担ってきた。月本氏はまず、旧約聖書における信の諸様相に分け入り、メソポタミア的伝統とも繋がる「畏怖としての信仰」、主従関係として神人関係を捉える「神に仕える」という信仰のあり方など、多様な信の様相があったことを指摘する。そして歴史的伝承の中に神の真実を求め、神人関係において語られる信のあり方に、キリスト教への決定的な転機を見ていく。ただし、キリスト教においても、その信の力点は歴史的真実性に置くか、あるいは人間側に置くかといったような複雑な緊張関係が存することもあわせて指摘する。一口に総括される「信」の内部においても、多様な要因が関連していることに気づかされる講演であった。

最後に鎌田繁教授（東京大学）は「宗教における『信』の諸相――イスラームの視座から」と題して、イスラームの基本をなす「六信・五行」に焦点を当てつつ、その信仰のありようをご講演いただいた。イスラームの伝統における「イーマーン」という語は、内的な信心として想起されるものでありながらも、そこでは「信ずる」ことと「正しい行いをする」ことが車の両輪をなし、信と実践とが不可分に結びついていると鎌田氏は指摘する。それゆえイスラームにおいては「何を信じ、そして何を行うか」という問いもまた、必然的に人間の活動の全局面に関与し、狭義の聖性の領域にとどまらず、生活の中にも流れ込み、必然的に俗的な領域とも連接していくこととなる。こうした「生活の宗教」としてのイスラームにおける信仰の様相は、内的な心理状態にばかり偏った近代的な信仰観に相対化を促していくとともに、グローバル化社会の中で共有しうる信仰観を作り上げていくことの難しさをも示唆するものと思われる。

続く総合討議では、先の発表を受けつつ、多様な角度から議論が展開された。まず、薗田氏によって提起された「非命題的な信」の位相については、神道にとどまらず、キリスト教やイスラーム、さらには特に大乗仏教などの仏教伝統においても共有しうるものであることが確認されていった。それは、近代西欧的と特徴付けられた「（実在措定的な）命題への同意」としての宗教観を超え、そして諸宗教伝統という枠組みを超えた、宗教的信仰というものの共約可能性をも切り拓くものとも思われる。

ただし、経験論的信頼とも人格的仮託とも語られる、この宗教的信の水位については、それが（半）命題的とも称された信仰の水準といかに関係するものであるか、そのとき信仰と真理についていかに語りうるのか、といった問題は今後さらに問われねばなるまい。特に薗田氏が、（半）命題的な信憑性の地平を支えてきた地域共同体のあり方が変容し、不可避的に情報化・商業化などの影響を受けざるを得ない今日、「あえて」語っていく神道の可能性について言及されたことに、信のあり方の豊饒性と問題の難しさを垣間見た思いがした。信の内側における複雑な力学についての月本氏の指摘も、「信仰の真理」という問題の複雑さを浮か

び上がらせるものといえよう。

また、実践的契機と心的契機とが不可避的に結びついた、弁証法的な両者の本質的な相関関係についても、各宗教伝統において確認されていった。これはやはり近代西洋的な心身二元論モデルを超過する宗教のあり方、ひいては人間存在のあり方を示唆するものとも位置づけられ、今後さらに強調されねばならない論点であろう。特に竹村氏が指摘するように、こうした問いに対自的に面してきた仏教伝統の教説は示唆に富もう。ただその時、単に「相関性」と語るだけで自足せず、さらにその関係性のあり方、そしてその多様性にも配視していくことが課題として残されよう。

これらの論点はまた、グローバル化世界における信の功罪という問いにも繋がっていこう。たとえ宗教的信が「人間存在の卑小さを超えた、経験論的信頼」として共約されうるとしても、「宗教間紛争」や「世界観の相克」といった現実を前に、いかに宗教的信の今日的意義を答えていくかは自明ではない。鎌田氏は、「イスラームは政教一致」とか「一神教は排他的」といった、人口に膾炙した諸批判は歴史的事実として誤りであり、実際における寛容さを指摘した。こうした論点は、「相互理解を阻む障壁」としての信仰観に対しても見直しを迫るものであろう。ただ、例えばイスラームにおける寛容が、自己を優位に想定した限りにおいて成り立つものであるならば、依然、いかに排他的真理といった伝統的な問題構制から脱しうるか、さらなる議論が要されよう。

上記の諸論点以外にも、博学多識な四氏に触発され、討議は多岐にわたって活発に繰り広げられ、たいへん実り多くかつ刺激的なシンポジウムとなったが、紙面の関係上、すべての議論を紹介できないことが悔やまれる。末筆とはなるが、拙い司会運びにもかかわらず、ご高見を披露くださったパネリストの四氏に感謝の意を申し上げたい。

（いいだ・あつし、宗教思想、鎌倉女子大学助教授）